

『編集版 亀隆院家の囚われ』のサンプル

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話から第二十話 (支援サイト掲載分)

泥話 (書下ろし)

【あらすじ】

孤児院出身の有名柔道選手である綺堂勝吾は、名門である亀隆院家に婿入りすることが決まっていた。

けれど、愛する妻である美奈代との初夜、勝吾の前に表れたのは亀隆院家の当主である亀隆院龍蔵であった。

亀隆院龍蔵によって男妾に貶められた勝吾は、亀隆院龍蔵の意志が絶対である亀隆院家の悪逆によって苛まれ、追い詰められていく。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

綺堂 勝吾 (きどう しょうご)

男。28歳。童貞。有名な柔道選手。公表はしていないが、孤児院の出身。

平常時 10.9cm、勃起時 25.5cm のずる剥けチンポ。逸物。

権勢を誇る名家であり、著名な政治家である亀隆院龍蔵を輩出した亀隆院家への婿入りが決まっていたが、美奈代との初夜に、亀隆院龍蔵に犯されてしまう。

亀隆院 龍蔵 (きりゅういん たつぞう)

男。77歳。権勢を誇る名家である亀隆院家の当主。

平常時 14.6cm、勃起時 31.9cm の極悪魔羅。

孫娘の美奈代の婿である勝吾を、己の男妾とする。

亀隆院 寧々子 (きりゅういん ねねこ)

女。48歳。亀隆院龍蔵の後妻。

男や女を次々と入れ替える亀隆院龍蔵を愛する一方、たとえ一方的な行為であろうとも、亀隆院龍蔵を受け入れた相手への容赦は一切しない苛烈かつ傍若無人な女性。

亀隆院 亮 (きりゅういん とおる)

男。18歳。亀隆院龍蔵と寧々子との間の男子。

美奈代と勝吾にとっては形式上、義理の叔父にあたる。

実の母親である寧々子に対し、性愛を抱き、寧々子の関心を引いた勝吾に対し、理不尽かつ地獄の煮凝りのような怨憎を抱く。

亀隆院 美奈代 (きりゅういん みなよ)

女。29歳。亀隆院龍蔵の孫娘。

勝吾とは恋愛結婚のはずであったが、亀隆院龍蔵に勝吾を奪われる。

安達 修一 (あだち しゅういち)

男。28歳。勝吾と同じ道場の門弟。

表向き、勝吾とは親友同士だが、修一は勝吾を男として愛している。また、勝吾には秘密にしているが亀隆院家に並ぶ名家の子息である。

第一話

とある道場のシャワールームで大和男児を体現したかのような立派な男がシャワーを浴びている。

男の名は綺堂勝吾。

この道場の門弟の中でも上位を占める柔道家だ。

短く刈り上げた髪を撫であげる手は武骨なものであり、節々の一つ一つが屈強な鍛錬の成果を物語っている。

目を閉じ、シャワーを浴びている顔は当世の流行りである中性的な美形とは真逆であり、がっしりとした顎は力強さを示している。

首は太く、のどぼとけは堂々と突き出している。

胸板は分厚く、まな板を仕込んでいるかのようだ。

まな板のような胸板は男らしさを彩る体毛で飾られており、乳輪が小さな乳首は慎ましやかに咲く花のようであった。

腕は太く、獅子すら絞め殺せそうなものであった。

六つに割れた腹筋は安易な登頂者を拒む絶壁のような陰しさをしている。

下腹部にはカモメが羽ばたいているかのような筋肉のラインが刻まれており、その中央にはみっしりとしたチン毛に囲まれた逸物が鎮座している。

逸物はだらんと垂れさがってはいたが、これが平常時だとは信じられないほど太く長かった。

血管の這う陰茎の先にはずる剥けの亀頭が雁首高く備わっている。

亀頭の色は綺麗なピンク色をしており、女体に溺れることのない勝吾が貞節を大切にしていることがよく伝わる汚れのない色であった。

金玉もまた、常人より大きく、毛の生えた玉袋の中で存在を強く主張している。

下種な勘繰りをするのならば、これほどの金玉の大きさならば、オナニーの頻度も高いだろう。

そして、シャワールームに堂々と立つ二本の足は屈強な身体に相応しい大樹の幹のような力強さを漂わせている。

身体のどこのパーツを取っても、文句のつけようのない大和男児。

それが綺堂勝吾なのだ。

勝吾は柔道の鍛錬で流した汗をシャワーで洗い流す。

勝吾の張りのある肌がシャワーの水滴を弾いていく。

勝吾は棚に備え付けられたピンク色の石鹸を手にとった。

ふんわりとした花の香りが勝吾の鼻に届く。

「……女物、か？」

勝吾は首を傾げた。

花の香りが漂う石鹸は、武骨な男たちが日夜切磋琢磨をする柔道の道場に相応しからぬ華やかさを纏っていたのだ。

勝吾はこの道場のシャワールームを鍛錬の度に使っているが、いつもはまとめて幾らで買えそうな安い石鹸が置かれていた。

このような華やかな石鹸が置かれていたことなどないのだ。

勝吾は石鹸を取り換えてもらおうかと思った。

武骨な性格の勝吾は、このような華やかな香りを纏う石鹸を使うということは、居心地が悪くて気が引けるのだ。

勝吾の時代錯誤じみた武骨さは、年若い道場生がムダ毛の処理だの眉毛のケアだのといたった話をしていると、なよなよとしていると感じてしまうほどなのだ。

男は裸一貫。

自らの身体で勝負をするべきであり、飾り立てたりするべきではない。

それが勝吾の人生哲学なのだ。

とはいえ、その一方で、勝吾は出された物に文句をつけるのは男らしくない、とも考えている。

わざわざ勝吾のために華やかな石鹸を用意したとは思えないし、女物のようだから使えない、というのはそれはそれで女々しい気がする。

勝吾は相反する価値観の間で悩んだ。

しかし、出された物に文句をつけるのは男らしくないという価値観が僅かに上回った。

勝吾は、花の香りがする石鹸を掌で泡立てた。

泡が増えるに従い、濃厚な香りがシャワールームに広がる。

勝吾は居たたまれなくなったが、使った石鹸に罪はない。

そのまま、逞しい首に泡を塗り、掌で擦り始めた。

続いて、胸板に泡を塗り、きゅつきゅと掌で胸板を擦る。

胸板を彩る胸毛がもじよもじよと動き、胸板の分厚い筋肉が勝吾の手の動きに合わせて弾力を見せる。

しかし、居心地が悪い。

婚約者である亀隆院美奈代のような嫺やかな女性ならば、このような華やかな石鹸を使っても釣り合いが取れるのだろうが、勝吾のような武骨な男が使うと場違いな気がしてくる。

だが、使いかけの石鹸を放るのは不作法だろう。

勝吾は腹毛に覆われた腹筋を泡で覆い、手で擦る。

身体を洗いながら美奈代のことを思い返す。

美奈代は名門である亀隆院家の長女だ。

惚れこんでいる勝吾のみならず、大抵の男が天女のようにと評価をする嫺やかな女性であり、名門の長女として教養を備え、そして、教養に相応しい清廉な人格を備えた才媛だ。

美奈代の父親である亀隆院明は国会議員であり、勝吾は明の選挙事務所でアルバイトをしている過程で美奈代と知り合った。

美奈代とは社会のあるべき理想について語り合い、映画の感想について語り合い、他愛もない日々を過ごす過程で愛を育んだ。

勝吾が明を狙った襲撃者を撃退したことをきっかけに交際を認められ、もうすぐ美奈代の実家である亀隆院本家で、亀隆院家の当主である亀隆院龍蔵の前で挙式するのだ。

著名な政治家を輩出している名門の亀隆院家に入るということは、社会をより良いものに変革したいと願う勝吾にとって、大きな一歩である。

愛する美奈代と共に、より良い社会のために邁進することができる己の人生の幸運を勝吾は大事にしたいと思っている。

美奈代……愛しい美奈代……

「んん……」

勝吾の口から小さく声が漏れた。

シャワーを浴びているにしては、少々ねっとりとした淫靡な声だ。

勝吾の股間では逸物が勃起し始めていた。

元々大きいせいか、勝吾の逸物の勃起角度は水平よりやや高い程度だ。

だが、膨張率の高さは逸物の名にふさわしいものであった。

血管が這う陰茎は力強さを増し、亀頭の存在感は憚ることのないほどだ。

玉袋は陰茎の根元に縮まったが、それが逆に金玉の大きさを強調している。

「参ったな……」

勝吾は溜息をついた。

シャワールームで勃起しているところを誰かに見られでもしたら、「この助平」とからかわれるだろう。

とはいえ、逸物を鎮めるためにオナニーをするなど以ての外だ。

オナニーはみだりにするべきではないと勝吾は考えている。

気持ちいいのは確かだが、している間は無防備であるし、生殖のために蓄えられた子種を無駄撃ちすることに抵抗感があるためだ。

そんな勝吾が、シャワールームでオナニーをできるわけがない。

勝吾はもう一度溜息をついた。

逸物の誤勃起など珍しいことではない。

身体を洗っているうちに萎えるだろう。

そう考え、勝吾はシャワーを再開する。

腕を交互に手で擦り、逞しい背中に鬼の顔を浮かべながら背中を手で擦る。

そのまま雄肉がみっしりと詰まった尻を擦り、逞しい尻肉の割れ目の間にも手を入れて擦る。

そして、足を片方ずつ挙げてつま先や足の指の間まで手で擦る。

だが、勝吾の逸物は萎えなかった。

それどころか、下腹部に熱が籠もり、勝吾はオナニーをしたくなってくる。

駄目だ……

勝吾は歯を食いしばった。

こんなところでオナニーをするのは男らしくない行為だ。

大体、ザーメンをぶっ放したりしたら臭いが残る。

勝吾がオナニーをしたことはあつという間にばれてしまう。

だが、勝吾の亀頭はピリピリとひりつき、溢れ出た我慢汁が亀頭を濡らす。

オナニーをしたっていいじゃないか。

勝吾の心に淫魔が囁く。

練習後の疲れ魔羅を鎮めるためにシャワールームでオナニーをする者は少なくない。

勝吾だって、そうした者を見てきた。

別に勝吾一人がオナニーをするわけではないのだから、構わないだろう、と淫魔が誘惑するのだ。

勝吾は淫魔の誘惑を振り払おうと首を振った。

こんなところでオナニーをすることは恥ずかしいことだ。

はしたないし、男らしくない行為だ。

勝吾は必死にそう考え、淫魔の囁きを跳ねのけようとする。

けれど、勝吾の勃起逸物からは次々に我慢汁が溢れ出て、射精準備を整えていく。

勝吾の下腹部も切ない熱が高まり、逸物を握ってしまえと囁いてくる。

オナニーをするべきか、せざるべきか。

性欲と誇りの間で勝吾の心は揺れ動く。

勝吾の手は勃起逸物を掴もうと近づいては引き返している。

だが、勝吾の心は徐々にオナニーに傾いている。

伸ばしては戻る手が徐々に勃起逸物に近づいていく。

「はあ……はあ……」

勝吾は淫らな息を吐きながら、どうすれば理性を殺せるか考えている。

勝吾の手が勃起逸物に触れるか触れないか、というところまで伸びた。

「なあに、してんだよ、勝吾？」

「ナニか？ ナニかあ！」

「なっ！」

背中を叩かれ、勝吾は驚いた。

慌てて振り返ると、その動きに合わせて勃起逸物がぶるんと揺れる。

振り返った先に、親友である安達修一の顔を見た勝吾は、恥ずかしさと居たたまれなさで頭が真っ白になった。

「なんだよ、洗濯物が強風で飛んで行ったような顔をして。

ちよいと驚かせただけじゃんか？」

「あ……ああ、そうだな」

勝吾は慌てて頷いた。

「相変わらずでっかいよな、お前のチンポ。

マジで日本最強じゃね？」

修一の称賛はお調子者の空言は思えなかった。

それほどまでの存在感を勝吾の逸物が備えており、そして、勝吾も修一も勝吾の逸物よりでかいチンポを見たことなどなかったのだ。

「俺は別に、チンポで日本最強になりたいわけじゃない」

勝吾は無然とした口調で呟く。

「分かってるって、社会を変革するんだろ？」

「亀隆院さんと手に手を取って、頑張れよ」

「……ああ」

修一の言葉に勝吾は頷いた。

「お前が選挙に出るなら、俺も応援しているからな」

「いや、さすがにそんなに早く選挙には出られないさ。

まずは亀隆院明先生の秘書として勉強させてもらおうつもりだ」

「そっか。頑張れよ。

お前の後援者第一号はこの俺だからな。

亀隆院さんにだって、この位置だけは譲らないからな」

修一の言葉に勝吾は笑った。

「俺は、お前も美奈代さんもどっちが上だとか順位をつけるつもりはないさ。

お前は大事な親友で、美奈代さんは愛する人だ」

勝吾の言葉に、なぜか修一がほろ苦い顔をした。

「……修一？」

勝吾が問いかけると、修一が笑みを作った。

「どうしても仕事の日程が調整できなくて結婚式には出られないが、幸せになれよ」

「おう！」

修一に軽く胸を叩かれ、勝吾も修一の胸を軽く叩いた。

「ふうむ、邪魔が入ったか」

老人が忌々しげに呟いた。

折角、媚薬石鹼を仕込み、綺堂勝吾の浅ましいオナニー姿を見てやろうと思ったのに、あと少しというところで邪魔が入り、勝吾がオナニーをする気をなくしてしまったのだ。

わざわざ人を雇って、シャワールームと石鹼という細工をしたのに、これでは片手落ちもいいところだ。

とはいえ、収穫はないわけではなかった。

勝吾の裸体、そして、勝吾の克己心の強さを確認できたことはよいことであった。

勝吾は知らない。

仕込まれていた媚薬石鹼は普通の男が使ったのならば、オナ猿になってしまうほど強力なものであるということ。

そんな媚薬石鹼を仕込まれたのに、勝吾はギリギリまでオナニーを我慢したのだ。

これほどまでに強固な意志、強固な貞節を浅ましい肉欲で崩したとき、勝吾の大和男児を体現したようないかつい顔はどんな風に歪むのか。

「まあよい。

お前はもう儂の手の内だ。

決して逃れることはできぬ……」

そう呟く老人の股間では、勝吾の逸物より大きな魔羅が隆々と鎮座していた。

奥付

『編集版 亀隆院家の囚われ』のサンプル

初出：2024年2月28日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep